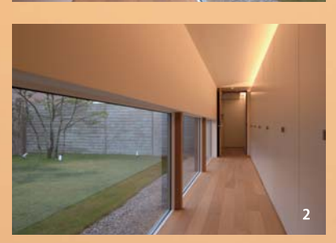
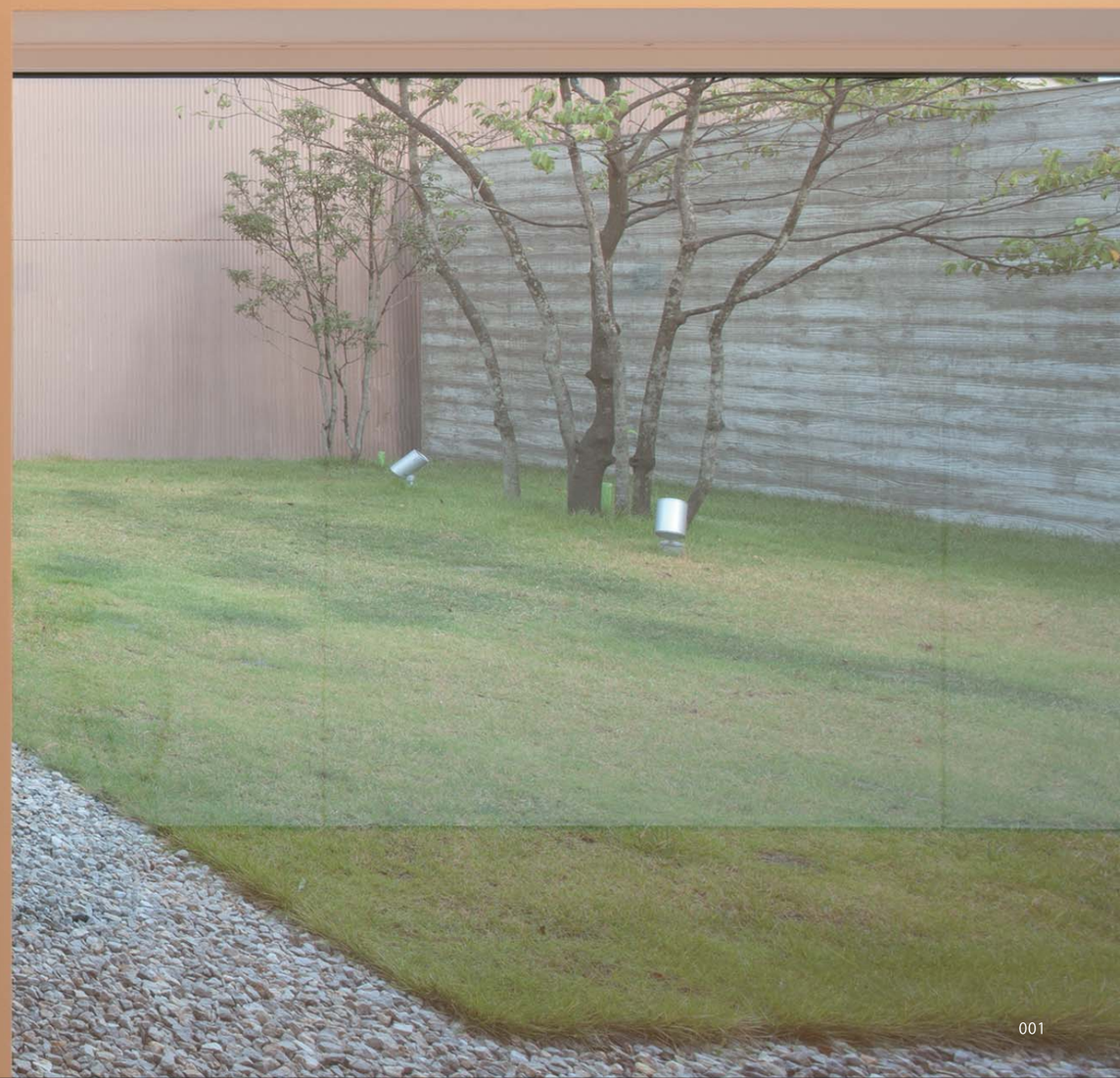
寛ぎへのアプローチ。

富山市街地にも近い住宅街にあるその家を、外から見ることはできない。コンクリートの壁が、玄関と車庫以外の部分への視線を阻んでいるからだ。しかしそこに冷淡さは感じられない。それは木目が写し取られたコンクリートの質感によるものかもしれないし、植栽の緑が訪れる人を受け入れているように感じられるせいかもしれない。

「家の正面は、いわば『顔』です。そこには一定の公共性が求められます」と建築家は言う。現代の住宅において、プライバシーは必ずといっていいほど言及される要素だが、ただ高い壁で囲っただけの家が立ち並ぶ町の風景は味気なく、冷たいものになってしまうだろう。



1 廊下からリビングへの視線を遮断し、廊下を曲がった際の驚きを演出。**2** 一方で芝の緑は視界に入るよう計算されている。



3 庭を右手に廊下を進むと、その先には広々とした空間が。

住宅が密集するこの地域に建てる家にも、プライバシーの確保は当然必要となるが、それが周囲とのかかわりを拒否するような構えであってはいけない。コンクリートの壁に与えた表情や植栽は、家と地域の間を取り持つ緩衝材だ。

玄関を入って右に曲がると、視界の端に緑が飛び込んでくる。右手の窓から見える庭の芝生だ。廊下は、四角い庭に沿って真っすぐに伸びている。この家が細長く、庭を囲むような造りになっていることを知るが、庭の全景を視界に収めることはできない。窓は床から胸の辺りまでの高さしかなく、足元の芝が見えるのみだ。

廊下を進み、右にある通路へと曲がる。この家を初めて訪れる人の多くは、そこで思わず立ち止まり、上方を仰ぎ見ることになる。

突然視界に入るリビングの大空間。左に上っていく傾斜の付いた天井を目で追うと、ロフト状の2階部分が見える。庭に面した壁のほぼ全面を占める窓からは、柔らかな自然光が差し込んでいる。四角く区切られた廊下から、縦・横の視野が一気に解き放たれる感覚だ。

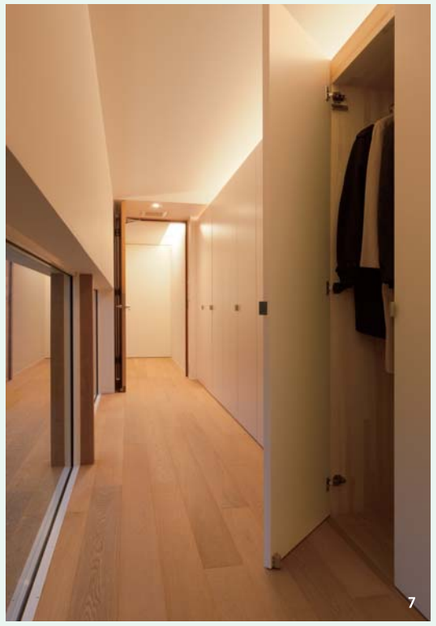
こうした効果は偶然の産物ではなく、建築家の計算によるものだ。廊下の窓をあえて低い位置にとり、本来なら視界に入るであろうリビングを隠す。天井が低く、通る人がやっと行き違える幅の廊下からふいに広いリビングに投げ出された来訪者は、空間のギャップに思わず立ち止まるというわけだ。

この窓が建築家の計らいである一方、廊下の反対側には、施主自らが施した小さなが仕掛けが隠れている。

廊下の反対側全面はクローゼットになっている。その向かって右端、幅数十センチの空間に、建築家が「お出かけコーナー」と呼ぶスペースが設けられている。

妻の発案によるこのスペースには、腕時計やバッグなど、夫婦が仕事で出かける際に身につけるすべてのものが収められている。自身も働いている妻が、あわただしい日常の中で家をきれいに保ちたいと考えた工夫だ。

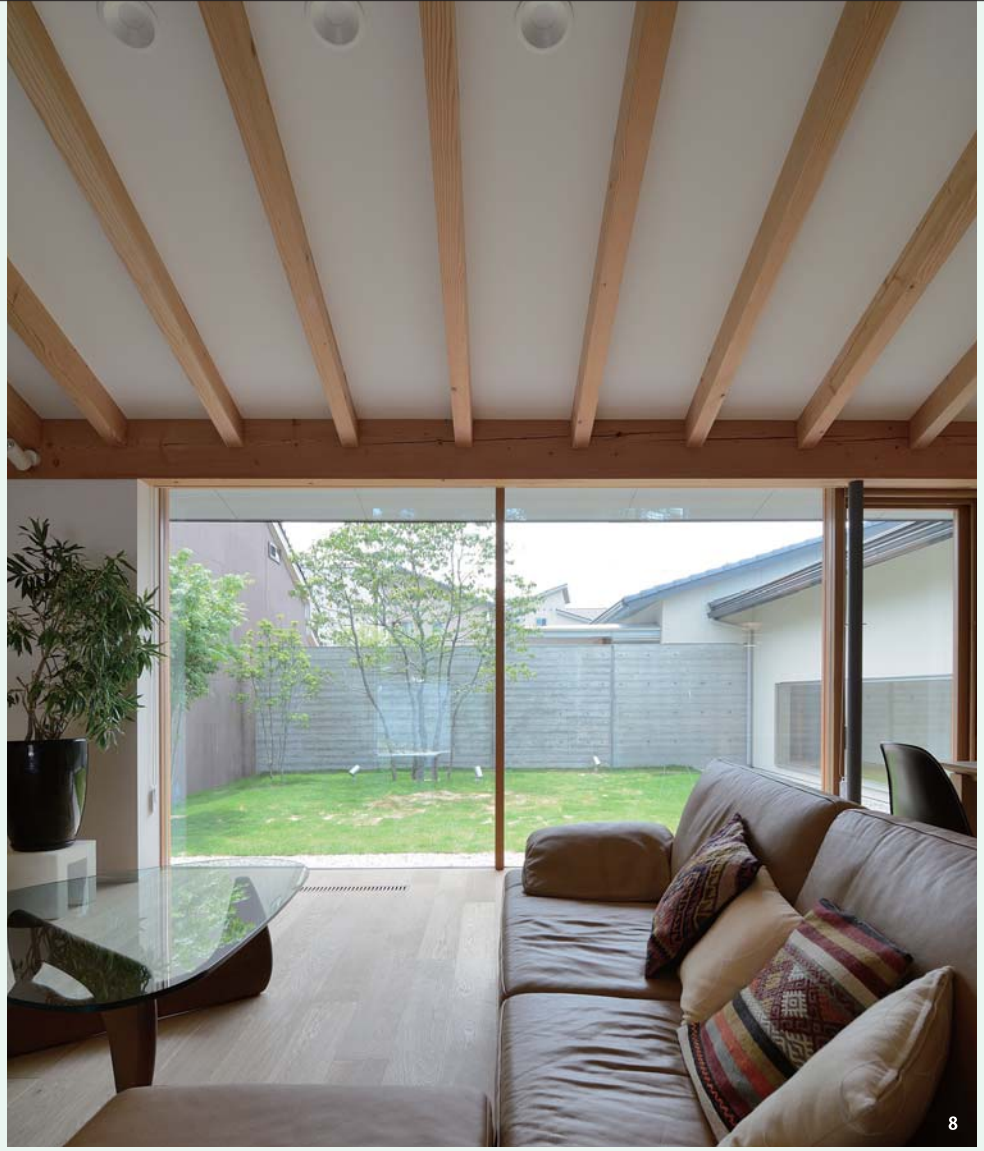
あわただしい朝。
帰宅後のひととき。
小さな自然がそばにある



7 廊下壁面は収納に。床から天井近くまである扉により、すっきりとした印象になっている。

4 プライバシーを守るコンクリートの壁は、焼いた杉板の型枠にコンクリートを流し込み、木目を写し取ったもの。**5** エントランスの一隅はすりガラスに。外に漏れる柔らかな光が人を出迎える。**6** 家正面の壁により、夜間でも外からの視線を気にせずにライトアップされた庭を眺めることができる。

「見せる／隠す」のバランスが空間にゆとりを作り出す



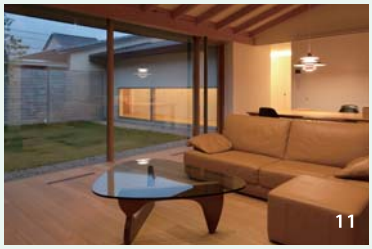
8 家の中から見るコンクリート壁は、床の高さによって外から見るよりも閉塞感のない印象に。

夫婦が家での時間のほとんどを過ごすというリビング。この空間を大事に考える施主の話を聞いた建築家は、細長い土地にあって十分な開放感をもつリビングを作りあげた。

本来なら柱が必要な広い空間の屋根を、土台に固定した2本の鋼管によって支え、スマートな印象の部屋に仕上げた。木造はもちろん、コンクリートや鉄骨の建築物の設計も行う建築家ならではの発想だ。

窓の向こうに広がる庭は、芝生と数本の立木でシンプルに仕上げた。その向こうには、外から見えたコンクリートの壁がある。緻密に高さを計算された壁が周囲の家を隠し、間に庭をおくことで、住宅街の真ん中にゆとりのある景観が生まれた。

プライバシーの確保と開放感の両立。その最適解といえる空間が、仕事帰りの夫婦を今日も優しく出迎えていることだろう。



9 ロフトにより縦方向の開放感が生まれる。**10** 窓付近の床には通風孔があり、ロフトのエアコンから送り出された空気が循環。**11** プライバシーと開放感を両立。

取材協力／青山建築計画事務所